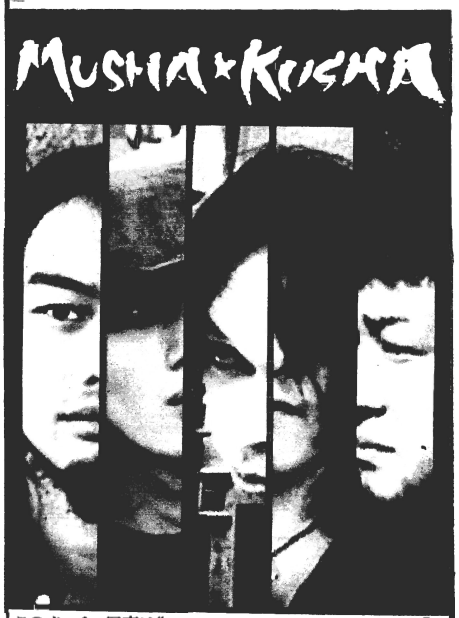
‘ὁ κόσμος, ἀλλοίωσις· ὁ βίος, ὑπόληψις.’

117号 2006.7.28

文・編集・発行
恋 かいこ

# LIVE：MUSHA×KUSHA




このメンバー写真は“caramel & MUSHA×KUSHA TOUR”のチラシを使わせていただきました。

## 2006.3.7 新宿アンティノック

『あやかし』がすごくよかった。蟲役者（梅原）はこの曲を演奏する前に、「こんなにたくさんの人がいるのだから、寂しがりやが一人や二人はいるかもしれない。そんな寂しがりやの歌です」というようなことを話した。大いにうなずかされた。

ステージに近いところにいたので、キーボード（北澤博之）がよく見えた。「この人が『十六夜ヶ原』を書いたのだ」ということを強く感じた。とくに、その『十六夜ヶ原』をやっているときに。この歌、中島敦の『山月記』の内容とすごく合致する。それに、歌詞を読むと、歌を聴いただけではわからない言葉の仕掛けがある（下のコピー参照）。

蟲役者はこうも話した。「もし僕が魔法使いだったら、この空間を最高のものにするでしょう」と。「魔法使いだったら」じゃなくて、魔法使いです、MUSHA×KUSHAは。だって、魔法使いが杖を一振りしたかのようにどうしようもないほどかったるい、うすっぺらい現実を消して、ファンタジーを見せてくれたのですから。まさしく『アヤカシ』の、「魔法で悲しみは消えた」という歌詞のとおりに。

## 2006.4.30 新宿ACB

この日の蟲役者は前回まで何回かのライブで見せたデヴィット・ボウィ風のメイクではなく、ハリネズミのような髪型に、黒い涙を流しているようなメイク。それに蟲役者の濃紺のローブ（蟲役者のロゴ入り）以外、メンバー全員が黒の衣裳。もうそれだけで世界を創り出している。↗

↗蟲役者がステージから語りかける。

「ロックとは何でしょう？　プレイすることだけがロックではないでしょう」、「心のど真ん中にぶちこんでやります」。

しかし、この日のMUSHA×KUSHAはロックをプレイしていたのか？」と聞かれれば、「否！」と答えるしかない。「では、何をしていたのか？」と聞かれてもいまはまだ答えができていない。

MUSHA×KUSHAの5人がこの日、ACBのステージでやっていたこと。それは人間の行うことのなかで、どの言葉があてはまるのかがまだわからない。「十六夜ヶ原」からとくにその疑問が頭から離れなくなった。

これはロックのプレイではない。心のど真ん中にぶちこむ感動を与えるものでもない。音楽でもない、演劇でもない、宗教活動でもない、自己主張でもない……。

あの5人があそこまで表皮を突き破ってやっていることの正体がわからない。あの場所がいったいどういうところだったのかがわからない。

## 2006.5.28 新宿ACB

DOLCEと2マン。MUSHA×KUSHAが1番目でセッティングがなく、メンバーが出てきてすぐに演奏が始まり、あっという間にMUSHA×KUSHAの世界に吸い込まれた。おまけにこの日はとりわけ最初の一音からメンバー全員が全開バリバリ。鳥肌がたった。あっという間に自分が「感じるだけの存在」になった。そして、また、あっという間にMUSHA×KUSHAから発せられるものをすべて感受するには、自分は器が小さすぎる、自分はこの全量をうけとめることなんてができやしないと覚った。

蟲役者に目を凝らしていると歌や楽器の音を聴き逃がしそうだし、歌や楽器の音に集中しようと目を閉じると、蟲役者が発する“言葉”を見逃してしまいそうで……。どうしていいのかわからなくなるほどだった。完敗に乾杯。

## 2006.7.19 新宿アンティノック

この日もMUSHA×KUSHAは1番目。オープンをだいぶ過ぎて中に入るとガラガラ。客はだれもいない。それがライブがはじまる頃は客でいっぱいに。MUSHA×KUSHAの人気のほどがうかがえる。

ACBより狭いからか、いつもより音がぎゅっとつまって聴こえたのが新鮮な感じだった。

この日、『アヤカシ』を聴いていて、辺見庸が、『独航記』のなかの『脱会』（右のコピー参照）に書いている「爛柯（らんか）」のことが思い起こされ、4月30日のライブ感想の最後に「あの場所がどういうところだったのかがわからない」と書いた「あの場所」が、この時わかった。あの場所も、いまいるこの場所も「彼岸」であるということなのだ。「此岸」（こちら側）ではなくて、「彼岸」（あちら側）。

ライブがすばらしいと、辺見庸の言い方を借りれば「物が腐食するほど」時間が長く感じられることがあって、それは、いろいろなことを感じたり考えたりするからだと、ずうっとそう思っていたが、そうはなくて、「彼岸と此岸とでは時の性質がちがう」からなのだ。そのことに考えが至った。

## 十六夜ヶ原

この歌は何回聴いても中島敦の『山月記』が思いうかぶ。「無くなってしまった記憶なんてどうでもいい」から後半はとくに。「虎と成り果てた今、己は漸くそれに気が付いた。それを思うと、己は今も胸を灼かれるような悔を感じる。／そういう時、己は、向こうの山の頂の巌に上り、空谷に向って吼える」（『山月記』）と「悔やみ抱えたケモノの声は月が見下ろす嘆き声」（『十六夜ヶ原』）。

MUSHA×KUSHAのホームページの『梅イエスタディ』2006/7/8には、「ムシャクシャの歌詞の殆どは、心の痛みを根底にもつものばかり」とあるが、『十六夜ヶ原』などその根底が実に深い。そこらの共感ではおさまらない深さがある。。この歌を聴いて、その根底までたどっていこうとすると、自分の心のどこまでも深いところに落ちていくような清々しい境地に行き着く。ここも「彼岸」なのかもしれない。『十六夜ヶ原』を聴くと、此岸（現実のこの世）では、いかに浅い呼吸、浅い反応、浅い意識で生きているかを思い知らされる。

『山月記』（中島敦著／絵 三輪孝輝）
ピーマンハウス刊「Pの文学絵本」より

## 脱会

テレビを見るのをやめた。いや、なにか発心したのではなく、仕事部屋を引っ越した際、アンテナの端子が合わなかったので、まあ、いいかというくらいの軽い心もちで断念したのである。以来、九ヵ月。以前は眼が腐るほど見ていたのだから、必然、生活は革命的に変わった。醒めていれば、眼というのはなにか見ていなくてはならないものらしく、かつてテレビに釘づけになっていた分だけ、他の好みのものを眺めているか読んでいるかということになる。これでストレスが大分減った。

「爛柯（らんか）」という故事を思い出した。樵（きこり）が山中で童子の打つ碁を見ているうち時のたつのを忘れ、気がつけば、斧の柯（え）が爛（くさ）っていたという話。私とテレビの関係は、この爛柯に似ていた気がする。淫するうちに、物が腐食するほど時がたっている。心づいたときには、すべてが空虚なのである。

爛柯はおそらく、山中に見た碁は仮象だったのであり、彼岸と此岸とでは時の性質がちがうのだと教えている。無理にこじつけていうなら、テレビ映像という仮象にも九泉か鬼ヶ島のそれのような時が流れ、そんな異界の時が、われわれの生活圏を絶えず侵犯しているのではないか。心を根腐れさせているのではなかろうか。などと、いろいろ勝手に想像できるのも、テレビ教という世界的一神教から、在家信者だったからではないかと思う。

脱会とはいえ、徹底してはいないから、まれには街の食堂などで見るともなくテレビに眼をやってしまう。すると、まあ、たまげるのだ。ワイドショーやニュースの、例の御常連の顔、顔、顔が、久しぶりだからなのかしらん、それとも、爛柯の摩訶不思議が出演者らにもおよぶものなのか、どっと老けこみ、そぞろ虚しく見えてくるのである。九ヵ月ぶりの長嶋監督の面貌など無残なほどにも感じたが、こちらは単に負けがこんでいるせいか。

辺見庸『独航記』（角川書店）186～187ページ『脱会』全文。

## 十六夜ヶ原

詞 北澤博之／曲 MUSHA×KUSHA

暗くたた唸うは 闇の波り　皇子の姿に 黒く 沿う虫
名を 用 語まり　れ 彼ぶ ちつ ち　昔 い 彼の　狩子いか
別 ど 私 頃　 言 ち た すに　動いている　石 回り
 き見 け て は　 れ 方 体 か 赤 い　無 く し て い る 記 憶 は 何 処 に
月 は 空 に 浮 有　風 は 夜 を 揺 ら す
思 い 出 す な い　明 日 の 光　 呼 ち れ て い る　闇 の 中 に
 し 本 伸 ば し て ち　 夜 を 取 り 戻 す な い　 い い こ ち 明 り 明 ち 明 ち す に は
 恋 は 四 重 れ て　 鳴 の 果 へ 消 え た
 音 楽 が ち は　 本 当 の 愛 り　 ち ち る 夜 に 変 ち　 長 禅
 香 火 は 止 ま り　 音 本 に 夜 ち　 昔 出 う 訓 上 の　十 六 夜 ち
無 く な っ て し ま っ て 記 憶 な ん て こ う で も い い
 い や　 ち の 人 に 意 味 が 無 い
 で な ら 思 い 出 た 月 の 見 え た ち は で も 思 ち　 残 酷 な 光 景 だ っ た
 ち こ こ は　 人 一 人 な く 世 に な っ た 私 が い た
 戻 り た い と い う 心 の 中 か ら の 叫 び ち 聞 こ え は な ら な い
 ち う　 い 音 は 存 在 し な い　 心 す ら 存 在 し な い の か も し れ な い
 そ こ に は 何 人 い る　そ こ に は 何 処 い る
人 の 心 を 失 っ た ケ モ ノ の 姿 は　そ こ に は 何 処 い る の だ

## アヤカシ

詞 梅原浩史／曲 MUSHA×KUSHA

人さまりて うの思 は　彼女は 上 た 楽 で した
トラウマ を 忘れ ら れ ず　月 は 見 ち て 泣 く事
アヤカシ は 去 り は な な ら　 始 め た 物 語 彼 女 こ う
少 し 寂 っ 打 ち 解 け た で　 眠 り ふ し は ヤ ク そ も
ニ ス ー ト に 感 じ た ら　 ク ー ル で 冷 静 な た ち
彼 女 で 切 り 出 し た ア ヤ カ シ の 口 で　ク ー ル に 言 わ せ て や る か ら
ふ た り 弦 に 出 た　 い ま 言 が ら な ら 言 い な ら な ら
ぬ く て 九 で ヤ カ シ も 彼 女　 寝 ま の は 不 思 議 の 国
 等 に 思 い 人 は 消 え た　 い ま 言 が ら な ら 言 い な ら な ら
彼 女 は 目 を 開 い　 ト ベ な ら な 思 え た ら
こ の 夜 で 世 界 は 明 る い　 歌 う 唄 い 歌 う ダ ン ス
 寂 し い で 泣 く な い　 ア ヤ カ シ が カ ー ト を 捨 て た
 明 日 な 夜 の 魔 法 が 解 け る ま で　 少 女 の 夢 に 消 え は
ぬ く て 九 で ヤ カ シ も 彼 女　 寝 ま の は 不 思 議 の 国
 等 に 思 い 人 は 消 え た　 い ま 言 が ら な ら 言 い な ら な ら
 ヤ ー ト が 感 じ た ら　 ク ー ル で 冷 静 な た ち
 ア ヤ カ シ で 切 り 出 し た　 ク ー ル で 言 わ せ て や る か ら
 ふ た り 弦 に 出 た　 い ま 言 が ら な ら 言 い な ら な ら
 ア ヤ カ シ が 消 え た　 ま ま ノ ロ の 幻 さ